

平成27年度第1回逗子市立図書館協議会会議録

日 時 平成27年5月25日（月）

10:00～11:45

場 所 市庁舎5階 第8会議室

1. 開会
2. 挨拶
3. 委嘱式
4. 委員紹介
5. 会長互選
6. 議事
 - (1) 平成27年度図書館の体制について（報告）
 - (2) 平成26年度図書館事業報告について（報告）
 - (3) 平成27年度図書館事業について（報告）
 - (4) 子どもの読書活動推進計画の進捗状況について（報告）
 - (5) 図書館分室について
 - (6) その他

出席委員

高鷲忠美会長 若林ふみ子委員 辻伸枝委員 汐崎順子委員

事務局

村松教育長

小川図書館長 鈴木館長補佐 利根川専任主査 楢山専任主任

傍聴 1名

【鈴木館長補佐】 これから平成27年度第1回図書館協議会を開催させていただきます。

本日は御出席いただきまして、ありがとうございます。まず、会議開催に当たりまして、村松教育長から御挨拶を申し上げます。よろしくお願いいたします。

【村松教育長】 おはようございます。平成26年6月から教育長になりました村松と申します。よろしくお願いいたします。スタートは久木中学校で8年間教員をやっております、その後は横須賀市の教育委員会に勤務し、最後は小学校長で、昨年3月に定年退職し、3カ月間は無職、無収入、無年金で（笑）、その後市議会で承認していただいたということで、青池前教育長から引き継いでいくことになりました。

委員の皆さんには、日ごろからお世話になっております。このたびはまた委員を引き続き引き受けていただきまして、本当にありがとうございます。昨年、私が着任して最初の仕事は海開きでしたけれども、あれは教育委員会の仕事というわけではなく、役所の職員として行ったのですが、大きなイベントとしては、図書館の石原慎太郎文庫の開設ということで、初めて仕事らしい仕事でしたが、非常に印象深く、逗子の図書館の存在価値とか、市民にどれだけ期待をされているかというのを肌身で感じたイベントでした。それ以降、図書館に行くと、いつも人がたくさんいて、それぞれの方があの環境の中で活動されているというのを実感しております。そういうことも多くの皆さんにサポートしていただいている。貸出も含めて、図書館をトータルして逗子市として考えている実績かなと考えております。貸出冊数や利用者数は、県内で本当に自慢できる内容で、先日全国都市教育長協議会という会議に、初めて出てまいりました。全国では都市と町村というのと2グループに分かれていまして、日頃は葉山町と話をしていればいいのですが、全国だと話題がやはり違うようです。都市部と町村とでは。都市が800あって、そのうち五百何十人の教育長が、同業者がそれだけ集まると何か気持ち悪いのですけれど（笑）、その中でも学校教育だけではなくて、社会教育とか図書館とか、そういう話題も出ていました。なかなか活性化に皆さん御苦労されているようですけれど、提案者ではなかったのであまり大きい声では言う場面はありませんでした。逗子市はそうではないよと言いたい気持ちはずっと思いながら参加をしていました。ともあれ、こういう会議でさまざまな貴重な御意見をいただいて、さらに充実したものにしていきたいと思っておりますので、今後ともぜひよろしくお願いいたします。

【鈴木館長補佐】 ありがとうございます。では、本日は第1回目の協議会となりますので、これから委嘱状の交付をさせていただきます。委員の皆さんのそれぞれの席に委嘱状を持って

回らせていただきますので、よろしくお願いいたします。

(委嘱状 交付)

ありがとうございます。もう1人、学校教育関係者ということで、柳原委員がいらっしゃるのですが、本日は所用のために欠席です。

では、教育長は、所用がありますので、これで退席とさせていただきます。よろしくお願いいたします。

(教育長 退席)

それでは、会議を継続します。まず、事前に皆様に本日の協議会の次第とあわせて資料の配付をさせていただきましたので、資料の確認をさせていただきます。本日の配付資料は、資料1から資料6までということで、資料1については、資料1-1、1-2というのがあります。次に、資料2については、平成26年度事業実施状況の一覧。次に、資料3につきましては、資料3-1、資料3-2というのがあります。それから資料4、資料5、資料6につきましては、資料6-1、資料6-2というものがございます。以上で配付資料ということですが、配付漏れはございませんか。大丈夫ですか。はい、ありがとうございます。

それでは、改めて委員の皆様を御紹介させていただきます。高鷲忠美委員です。

【高鷲委員】 高鷲です。よろしくお願いいたします。

【鈴木館長補佐】 若林ふみ子委員です。

【若林委員】 若林ふみ子です。

【鈴木館長補佐】 辻伸枝委員です。

【辻委員】 辻伸枝です。よろしくお願いいたします。

【鈴木館長補佐】 汐崎順子委員です。

【汐崎委員】 汐崎です。よろしくお願いいたします。

【鈴木館長補佐】 もう1人、学校教育関係者の柳原正廣委員は、本日欠席です。任期につきましては、平成29年2月28日までの2年間ということになりますので、御承知おきください。

本日は図書館協議会委員、柳原委員以外の御出席をいただいておりますので、図書館協議会運営規則第3条第2項の規定により、会議は成立しております。

議事に入る前に、図書館協議会運営規則第2条の規定で、会長の任期は1年とする。ただし再任は妨げないと規定されており、会長は委員の互選によりこれを定めることになっておりますので、委員の皆様による互選で会長の選出をお願いしたいと思います。どなたか立候補ある

いは御推薦をしていただける方はお願いいたします。

(「高鷲委員」の声あり)

皆様から高鷲委員を会長にということで、御推薦をいただきましたが、高鷲委員につきましてはお引き受けいただけますでしょうか。

【高鷲委員】 はい、わかりました。よろしくお願いいたします。

【鈴木館長補佐】 ありがとうございます。それでは会長、席の移動をお願いいたします。

(高鷲会長、会長席に着席)

それでは、会長から一言御挨拶と、それから会長職務代理者の指名をお願いいたします。

【高鷲会長】 高鷲です。よろしくお願いいたします。また新年度が始まって、逗子市の図書館は職員の入れ替わりがあり、また分室ができて、新たな局面を迎えたと思えますけれども、ますますこれから図書館の充実を図っていくので、皆さんの御意見、よろしくお願いいたします。総合計画を見てみましたら、去年までのものがあって、またインターネットでは今年からのものがありませんでしたが、どのように載っているのか、楽しんで見たいと思えますし、生涯学習の計画を見ましたら、図書館の充実という、何かわけのわからない文言で、何でもできるなという感じで、さて、何をすることが必要なのかなと思いました。さらに、財政のデータを見ても、これはきついですね。余裕が全くないというのがわかるので、この中でどうすればできるのかというのが、やはり今後の課題になっていくと思えます。

さて、当協議会の会長職務代理者ですけれども、逗子市立図書館協議会運営規則第2条第4項の規定に基づいて、若林委員を指名したいと思えますが、よろしくお願いいたします。

それでは議事に入りたいと思えます。議題1として、事務局から平成27年度図書館の体制について報告をお願いいたします。

【鈴木館長補佐】 それでは、平成27年度の図書館の体制について御報告をさせていただきます。図書館では、小川館長を筆頭に、一般事務職員として館長補佐が1名、専任主査が2名、任期付職員が4名、再任用職員が1名、非常勤事務嘱託員が40名、以上で図書館を運営していきます。そのうち、分室の職員につきましては、週3日勤務の職員がそれぞれ3名ずつ、合計6名という形で分室を運営していきます。以上で図書館の体制についての報告を終わります。

【高鷲会長】 任期付、再任用、非常勤、このうちどのくらい入れかわったのですか。

【鈴木館長補佐】 任期付職員4名のうち、1名が前年度からの引き続きの採用です。それ以外の3名については、新しい任期付職員ということで、新人の職員になります。ただ、そのう

ちの2名が以前当館の非常勤職員として勤務していた職員ですので、当館の業務内容については精通している職員です。残りの1名につきましても、他の図書館で勤務をしていた職員ということで、図書館経験、実務経験のある職員になります。以上です。

【高鷲会長】 ありがとうございます。それほど大幅な入れかえはなかったということでしょうか。

【鈴木館長補佐】 はい、そうですね。継続した運営が可能ということで考えております。

【高鷲会長】 今の議題1について御質問はございますか。

【辻委員】 高鷲会長から、任期付職員の入れ替えのお話を伺いましたが、40名いらっしゃる非常勤職員の方は、どういう形で入れ替わりがあったのでしょうか。

【鈴木館長補佐】 10年勤務の非常勤職員が退職されましたので、その補充ということで、新採用の非常勤職員3名が採用されました。1名は、この3月まで任期付職員として勤務をしていたベテランの職員が非常勤職員となりました。

【辻委員】 では、リバースした感じですね。

【鈴木館長補佐】 そうです。戻ってきたという形です。それ以外の2名のうち1名、週4日勤務の非常勤職員については、過去にやはり当館で非常勤職員として勤務経験のある職員で、もう1人の職員については、図書館経験が初めての新人の職員という内訳になっております。

【辻委員】 よろしいですか。同じく非常勤職員の方についてですけれども、非常勤40名とおっしゃって、そのうち分室にそれぞれ3名計6名ということですが、これは固定なのでしょうか。

【鈴木館長補佐】 はい。今のところ固定という形で行っています。というのは、分室の利用者というのが、やはりその地域に住んでいらっしゃる方が多いことから、なるべく顔のわかる職員が中核として運営するほうが好ましいだろうということで、現在は分室の職員という形で、勤務先もその分室という形をとらせていただきます。ただ、3人だけだと、休暇を取ったり、3人体制が整わないときは図書館の職員が応援に行くという形で、現在は週3日程度、図書館の非常勤職員が半日、応援に行くという体制をとっております。

【高鷲会長】 分室については、また後ほど議題としますから、そちらで詳しくお願いいたします。

【辻委員】 はい、わかりました。

【高鷲会長】 職員に関しては、入れ替わりもあり、結構勤務体制が複雑ですから、新人の教

育は大変ですよ。そこら辺はどうなのでしょう。

【鈴木館長補佐】 ひととおり覚えるまで、相当な期間がかかるような感じですね。

【汐崎委員】 これだけ人がいると、ローテーションを組むのが、ものすごく大変そうですね。

【高鷲会長】 組み合わせによっても違って来るでしょうからね。早く固定されればいいですね。また、この問題につきましては、後ほど何かありましたら、まとめて御質問ください。

次に、議題2の平成26年度図書館事業について、事務局から報告をお願いいたします。

【利根川専任主査】 それでは、昨年度の事業実施状況について説明をさせていただきます。資料については、資料1の利用の統計、2番目が事業の実施状況、3番目に展示の報告。そして最後が事業の実施状況調べということで、予算の執行状況について示したものです。

まず利用状況についてですけれども、資料の1-1をご覧ください。これは3年分の比較統計を出しておりますが、来館者数、貸出者数、貸出冊数、予約件数といった数字について、平成20年度をピークに、じわじわと減少傾向が昨年も継続をしていたという結果が、この表を作成するにあたりあらわれてまいりました。恐らく、貸出冊数の減少に関しては、最近の電子書籍やスマートフォンの等の普及による影響が、この数字にあらわれてきているのではないかと思います。資料1-2の児童についても、児童書の貸出冊数の絶対数は減少傾向が見てとれます。実際に児童室にいる子どもの数は、それほど減ってはいないとは思いますが、貸出冊数については数字で打ち出してみますと減少傾向が継続しています。

次に資料2の事業の実施状況ですが、事業についてはそのほとんどは児童が対象で、一般向けの事業は定例の名画座のみになります。昨年度、特に前半は洋画の名画を上映したところ、この資料では来館者数100名となっておりますけれども、実際は200名近く来られて、やむなく入場をお断りしたというケースもありまして、名画座については毎回好評をいただいているところであります。

その次の医療の講演会ですけれども、国立がん研究センターとの共催で、昨年度設置しました「健康・医療情報コーナー」の開設にあわせて、12月に「胃がんとその遭遇」というタイトルで、講演会を開催しました。市長・副市長にも参加いただき、72名という多くの方が御来場くださいました。

次に、資料3の1と2ですが、企画の展示のリストをお示ししてあります。そのときどきの旬のテーマを選びながら、職員が創意工夫を凝らしながら企画展示を実施しております。特に昨年度は、4月は市制施行60周年という年でもあり、先ほどの教育長の話にもありましたが、

7月に石原慎太郎文庫の設置ということもあり、それにちなむ企画展示、さらには医療講演会と重ねて、12月には医療小説の世界ということでの企画展示も実施しました。

その次の資料3-2ですが、昨年度設置いたしました健康・医療情報コーナーの設置に伴い、健康・医療に特化したテーマ展示を実施しております。春先ですと花粉症、夏場は夏を乗り切るための対処法、あるいは冬場ですと風邪・インフルエンザ予防といった、そのときどきの旬なテーマを選んで企画展示をしております。テーマ別に本を紹介した印刷物も配っておりますので、利用者の皆さんに好評をいただいているところであります。

次の、資料の4ですが、昨年度の事業実施状況ですけれども、実質は5つの事業がありまして、最初の蔵書整備事業については、昨年度は2,100万円ほどの資料購入費をほぼ全額執行いたしました。活動事業に関してもほぼ従来どおりの形で執行いたしました。維持管理事業についても、昨年度はちょうど現在の図書館が10年目を迎えましたが、特にロッカーなどの備品について、かなり老朽化が進んできたということで、修繕等を行いました。システム管理は、ほぼ従来どおりの金額となっております。

5番目は、補正予算でついたものでありますが、分室整備事業ということで、本年4月より旧公民館がコミュニティセンターに転用になるのに伴い、図書館の分室にすることで、そのための準備のために改装工事を、今年の1月から2月にかけて実施をした分です。それから図書館事務費は、これは館長の報酬等も含まれておりますが、ほぼ当初の予定どおり執行したところ です。

昨年度の事業実施状況については、以上です。

【高鷲会長】 はい、ありがとうございました。公共図書館については、現在、曲がり角にきていると思いますけれども、公共図書館の数そのものも、昨年初めて減りました。統合したりとか、ほかの施設にまとまったりして、全体の数としては、減っています。それから貸出冊数も、2010年から減っています。なぜ減っているのかということは、まだ分析不足でわからないのですけれども、図書館の数が減ったからなのか、それとも別の要因があるのか、いずれにせよ公共図書館が、少子化の影響や財政難等により、これから先さらに困った状況が出てくることが予想されますので、それを踏まえた上での図書館サービスを考えていかなければいけないのではないかと考えています。

昨年度の1年間の図書館事業について、何か御質問ありましたらどうぞ、お願いいたします。

【辻委員】 1枚目の資料1-1の統計ですけれども、レファレンスの件数が平成24年度、25

年度は、ほぼ同じで、昨年度がすごく減っているように見えるのは、これは統計のとり方の問題ですか。

【小川図書館長】 その理由は、特定の方が1人いらっしゃっています。夜に来て、質問の数が非常に多い方がいらっしゃいました。夜はレファレンスやらないということにしていたのですが、つきっきりで質問されていた方が、来館されなくなりました。その数を数えてもらって、確認しています。ですから、総合的な問題のことよりも、当館の場合には明らかにそういう方が、去年の暮れから来ていないことによるものです。

【高鷲会長】 それで1,800の減ですか。

【汐崎委員】 個人情報もあるかもしれませんが、レファレンスの内容は傾向が多岐にわたっているのでしょうか。

【小川図書館長】 多岐にわたりますが、時事問題や市役所に何か問題が起きたときには、その背景を調べるとか、法律がどうなっているのかとか、国は何をしたのかとか、そういうところまで全部質問されています。

【汐崎委員】 それに答えるのも図書館の役割だと思いますが、それが3分の1ぐらい占めていたということですね。

【若林委員】 毎日コピーを取られるのですよね。

【小川図書館長】 コピーの枚数も減っています。

【汐崎委員】 1人の影響力って大きいですね。でも、去年の暮れからいらっしゃらなくなったのですね。

【小川図書館長】 現在は見えていません。

【汐崎委員】 これは、数のトリックですね。

【小川図書館長】 それともう一つは、一番新しい図書館雑誌に書いてあることですが、アメリカでもレファレンスは減っています、ものすごく。ただし、アメリカ、イギリスは、貸し出しは減っていないけれども、レファレンスは大きく減っています。

【高鷲会長】 インターネットの影響でしょうね。

【小川図書館長】 そうです。

【若林委員】 インターネットは、私も大分このごろこなせるようになりました。

【小川図書館長】 ですから、インターネットで調べると、信用がおけないと言いながらも、皆さん結構使っています。

【汐崎委員】 自己解決されているということですね。

【小川図書館長】 そうですね。それがふえているということがありますので、今後はその問題も考えていく必要があるのかなという気がします。

【若林委員】 話し相手が欲しいというような印象もありますよね。

【小川図書館長】 結局そういうことですね。

【若林委員】 どなたかと話したくて仕方がないのでしょね。

【高鷲会長】 どうしても高齢者が多くなると、その中のうちの何人かがそういった傾向が見られるようになりますよね。

【辻委員】 これだけの件数となるのですね。

【汐崎委員】 児童書を1人が一生懸命、たくさん借りたら、もしかしたらものすごく伸びるかもしれないですね。

【高鷲会長】 完全に個人使用ですよ、これはもう。

【汐崎委員】 あと、展示に関するのですが、資料をすごく細かく見せていただいて、展示をすることによって、どれだけのタイトルを展示して、それに対しての貸出冊数がどれほどあったのかというのを、こういう形で数字で見せるのは、ものすごく大変な作業だと思います。実際に、例えば健康・医療情報の報告だと、6月から展示が1階に移動した途端に貸出冊数がやはりとてもふえている。そうなると、展示の効果とか、恐らくセパレートというのか、分離したことによって利用者がより利用しやすくなったのかなというのが、漠然とではなく、数字で見られるのは、すごく大切なことだと思います。

【小川図書館長】 優秀な職員がいないとできません。

【汐崎委員】 そうですよ。ところで、貸出冊数は、どのようにピックアップをするのでしょうか。やはり、タグか何かをつけるのでしょうか。

【小川図書館長】 場所は特定してありますので、貸し出しすればその数字がでてきます。

【汐崎委員】 もちろん、そのために、展示のためのコレクションの中から抽出をして、今お話もありましたけど、さまざまな本があることを、利用者に見せるためには、職員もさまざまな資料があることを認識していなければいけないので、非常に手間がかかることがうかがわれます。でも、こうやって実際にこれだけのタイトルを集めて、これだけの期間展示したら、これだけの貸出冊数があったという例は、あまり見たことがありません。この貸出冊数までとか、タイトル数を、私は統計で見たことがないので、少々びっくりしています。

【高鷺会長】 小川館長、以前に健康情報、医療情報に関しては、一応担当の責任者はおいているとおっしゃっていましたよね。この方は1カ月ごとにこういう展示をするのは、大変ですね、実際。

【小川図書館長】 常に考えて取り組んでくれています。

【高鷺会長】 都立中央図書館はこれを始めましたよね。10年ぐらい前でしょうか。ものすごく多いですよね。健康医療情報関係の本が大量にある。

【汐崎委員】 個人の闘病記がたくさんありますよね。

【高鷺会長】 それも、闘病記文庫も日本で初めて設置しましたが、そのほか医学関係の本が、たくさんあります。4万冊の5万冊ですよ、たしかね。逗子市は、冊数は少ないけれども、その中でやりくりするのは大変でしょうね。

【小川図書館長】 それと、1階に移したというのは、入り口を入りすぐ右手に、雑誌のタイトル数を減らして、棚があいたものですから、そこをうまく使おうということで、始めました。一般的には見えないほうがいいのですけれども、展示に関しては、むしろ手にとってもらえる本ということですから、それは場所が成功したと思います。

【汐崎委員】 展示は1階で、コーナーは2階で。そのリンクもうまくできている。あ、なるほど、なるほど。おもしろいですね。非常に興味深く資料を読み解くと、おもしろいなと思います。

【高鷺会長】 企画展示は、職員の方がそれぞれ考えて、企画するわけですね。

【小川図書館長】 医療情報で言うと、難しかったのは医療小説の企画展示でしたね。

【汐崎委員】 どのような作品を集めたのでしょうか。

【小川図書館長】 医療小説の展示の際は、リストを作成しましたが、まず、自分たちで読んで気がついたことを拾っていく必要がある。これは時間をかけて、常にこの手のものはあるよと、ストックしておく必要はありますね。

【高鷺会長】 医療小説、代表的な作品として、何を展示したのでしょうか。

【小川図書館長】 お医者さんの作家が結構いらっしゃいますので、たとえば渡辺淳一さんですね。

【高鷺会長】 「ドクターX」初めテレビでは医療ドラマが盛んですからね。

【辻委員】 医療関係のミステリーも結構人気ですものね。

【高鷺会長】 ありますよね。

【汐崎委員】 海外の小説でもありますよね。

【小川図書館長】 海外だと、精神的なビジネスですね。

【高鷲会長】 ありますね、確かにそれは。

【小川図書館長】 ふだんから気をつけていないといけませんからね。

【汐崎委員】 図書館員は資料の知識があるだけではなく、図書館員として図書館の情報として勧められるかどうかというところですね。提供する責任があるので。

【高鷲会長】 またそれぞれの、時期の旬を選ばなければいけないから、結構大変だろうなと思います。

【汐崎委員】 花粉症とアレルギーとかですか。5月病と鬱とかですかね。

【高鷲会長】 1回企画したら、また次の年に同じ企画はできませんからね。気になったのは児童書ですけども、平成24年度から25年度にかけては2,000冊ぐらいの減なのだけけど、平成25年度から26年度にかけては結構差が大きいですよ、7,000冊ぐらい減っていますね。14万2,000冊が13万5,000冊に減っています。結構大きいかなと思って見ていました。

【小川図書館長】 子どもの貸出冊数がぐっと減っていますね。

【高鷲会長】 逗子市の人口は5万8,000人ぐらいですよ。

【汐崎委員】 学校図書館の充実とか、そういうこととの関係とかというのは特になのでしょうか。

【小川図書館長】 学校に支援パックとして貸し出しはしていますけれども、おそらく、1つは飛びつく本がないということが理由としてあげられると思います。

【高鷲会長】 あと1つ気になるのが、逗子小学校は授業以外では図書館を全く使っていないので、気になっています。

【汐崎委員】 連携がうまくいけば、すごく効果的に回るのではないのでしょうか。

【小川図書館長】 学校の方針まで口は出せませんのでね。こちらとしては、ですけども、いつでもどうぞと申し上げてはあります。

【汐崎委員】 校長先生もあるでしょうけど、学校司書、司書教諭の先生の意識の問題もあるのでしょうか。

【高鷲会長】 各校に学校司書が配属されていますよね。

【小川図書館長】 配属はされていますけれども、図書室の管理が中心ですから。

【辻委員】 週3日勤務の非常勤職員ですね。

【汐崎委員】 学校との共同での事業というものは、あるのでしょうか。

【小川図書館長】 共同の事業は今のところ全くありません。

【汐崎委員】 連絡会はあるのでしょうか。

【小川図書館長】 図書館も参加しますが、学校図書館の連絡会は開催しています。

【鈴木館長補佐】 担当職員の連絡会は、年に数回ありまして、その中でPRして、図書館の利用ということで報告はさせていただいています。図書館の見学については、平成26年度は逗子小学校は、3年生が1回だけありました。ただ、本年度もPRしたということで、これから6月中に学年で1回来る予定がありますので、もう少し強化していきたいと考えてはいるのですが、やはり現在は授業が忙しく、なかなか図書館見学、それから図書館利用というところにまでは、踏み込めないというところが実態としてはあります。

【汐崎委員】 学校見学というのは、子どもたちが直接図書館に来るのですね。

【鈴木館長補佐】 はい、そうです。

【汐崎委員】 図書館側から学校訪問というのではないのでしょうか。

【小川図書館長】 それもいつでもと申し上げているのですけれども、それもなかなか予定が立たないという。4月に図書館と学校図書室の担当者、教頭先生も含めての集まりがありましたが、なかなか図書館に向き合うというのは難しい。あるいは読書をとというのは、難しいなどという印象ですね。以前と比べたら、ガードがかたくなってきていますね。

【汐崎委員】 一時公共図書館と学校図書館は、すごく縄張り意識ではありませんが、先生方も図書館側に入ってこられると、やりにくいということもあった。例えば、私が図書館員だったときは、なかなか学校に入って行きづらかったものですが、総合学習が始まって、ある意味、学校が図書館に対して期待することも多くなって、割と敷居が低くなったなど感じる時期がありました。でも、やはりなかなか難しいのですか。

【小川図書館長】 カリキュラムが変わって、授業時間がふえて、余分なことがほとんどできないという、そんな印象でしたね。

【高鷲会長】 ですから図書館を使ったほうがずっと楽だし、子どもの力がつくし、授業が豊かになるよということを先生が実感しなければいけませんよね。そのための学校司書がいて、司書教諭がきちんと動ける体制になっていることが肝要ですよ。

【汐崎委員】 司書教諭の方が学校教育のカリキュラムの中でどれだけ図書館の活用ができるかということ認識していなければなりませんね。

【辻委員】 でも、司書教諭はほとんど充て職ですね。

【高鷲会長】 充て職で、ほとんど図書館にタッチできていなければ、何にも動かない。そこが窓口で、ほかの先生とのコミュニケーションをとっておかなければなりません。

【汐崎委員】 司書がどんなに頑張っても、コネクションがとれなければなりませんね。

【高鷲会長】 ただ、横浜市の件でも言ったように、一番怖いのは、学校司書が熱心な人ほど、ひとり職場で独善的になりがちです。その人がいるから任せてしまおうと、先生はみんな知らないふりをするわけです。

【汐崎委員】 でも、横浜市は学校司書が500人もいるわけですから。

【高鷲会長】 大変ですよ、横浜市は。

【辻委員】 林市長になってから、学校司書という形で図書整理委員のような形ですね。

【汐崎委員】 そうです。ただ、500人という数を公約のような形で林市長がおっしゃっていて、それだけの人を各学校に1人ずつ配置することになっている。どんな人を500人も集めるのかということ、あと、司書、司書教諭、先生とのつながりがうまくいっていないければ、大変です。学校図書館は本当にひとり職場で、そこに配置される人たちがどういうコンセプトで取り組むかによって大きく違ってきます。もちろん、経験知もあると思いますが、500人というのは、想像もつきません。

【辻委員】 毎回120人～130人というように募集がかかっていますね。

【汐崎委員】 各学校図書館が、司書のお城のようになるところがあると思います。

【高鷲会長】 ですから、一番に申し上げたのは、学校司書になった人の図書館経験というのは、大体公共図書館であるということです。

【辻委員】 経験のない方もたくさんいらっしゃるようです。

【高鷲会長】 学校図書館の中でサービスを展開するときに、公共図書館の論理を持ち込もうとするのですよね。学校は学校で、教育施設なのだから、先生方とどう共同するかです。司書教諭とのコミュニケーションですね、まず第1に大切なのは、それで学校の先生、校長とのコミュニケーション、これをやらなければならないのと、一人で頑張りすぎないこと。一人で頑張りすぎると、学校図書館ではなくなる。すぐだめになりますよ。横浜市のあの体制も、これだけ費用をかけているのに、効率が非常に悪いですね。1人当たり、国と同じ予算をかけていますよね。それで500人ですから、並大抵ではありません。

【辻委員】 逗子市はどうなのでしょう。

【高鷲会長】 昨年も私、講演のときにお話ししましたがけれど、やはり先生方がもっとたくさん来てくれなければ、意味がありません。

【小川図書館長】 返子もそうです。長いことずっと一つの学校にいと、弊害が出ます。そこで、昨年図書館指導員の学校異動を教育委員会が実施しました。

【高鷲会長】 司書さんも、それでよしとなってしまいます。

【辻委員】 それで昨年、入れ替わりがありましたよね。ですから、また一から経験を積んでいかなければなりませんね。

【小川図書館長】 そのときに、司書がいて、司書教諭がいて、先生がいてという、仕組みがしっかりとでき上がってればいいのですけれども、司書の場合、週3日勤務だと恐らく職員会議にも出ていませんね。

【辻委員】 職員会議には出席しないと聞いています。

【高鷲会長】 それではいけませんね。

【小川図書館長】 それでは、学校教育の方針が反映できないし、図書館の方針を学校の中に持ち込むことができなくなります。

【高鷲会長】 本の貸し借りとか、来る子どもたちの相手をする、それだけで終わってしまいます。

【小川図書館長】 さきほどの話にもつながりますが、リクエスト制度を導入しています。学校図書館でリクエストを実施するのはおかしいですね。あれを買え、これを買えと。子どもたちに聞いて用意するだけの予算もないし、そういう機能自体を持っていないはずで、本来は。

【高鷲会長】 それは公共図書館のまねですよ。

【汐崎委員】 学校図書館こそ、その蔵書は、学校教育の方向性の中で構築されるべきです。

【高鷲会長】 子どもの読書のためと先生の授業に対するものと、2通り定着させなければいけません。

【小川図書館長】 大きな方針が、しっかり図書室に反映するというつくりになっていませんね。組織的にも。職員をあてがってはいるけれども、それはやはり何にもしようがないです。そうすると、ただの留守番となってしまいます。

【汐崎委員】 あと、ボランティアさんたちが行っていますよね。

【辻委員】 行っていますね。私も20年来、学校に行っていますけれども、学校側がウェルカムという雰囲気になった時期もありましたが、やはり館長がおっしゃったように、大阪の池田

小学校での殺傷事件をきっかけに、外部の者を受け入れるときにはよくよく気をつけるようにということで、常に正門の扉は鍵をかけて閉めてくださいというような、現在はやや緩和されましたけれども、ボランティアは一応受け入れてはもらっているものの、なかなか発展的にはなってこないですね。それと、ものすごくカリキュラムがタイトになってきているので、これまでなら、おはなし会のプログラムもこちらに任せていただいて、グリムの昔話や基本的な日本の昔話であるとかを入れておりましたが、学校側から5、6年生にはこういうものを読んでほしい、こちらのほうで取り組んでほしいという要望が何年か前からくるようになりました。先生たちの中で、朝の20分にシフトしてくださいというようになってきているので、連携をとっていくというのは現実問題、難しいですね。

【高鷲会長】 それで、一方では文部科学省が、課題解決型学習に、シフトしてやりなさいと言っているでしょう。あれこそ学校図書館を使わなければ全く機能しませんね。総合的学習もそうですね。

【小川図書館長】 授業時間を削ることはまかりならないそうです。ですから、朝読が15分。その15分の中に詰め込んでくださいねと。現在はもうきちんと読む時間を与えられていませんね。

【高鷲会長】 この間も私がかかわっている山形県鶴岡市立朝陽第一小学校の新しい司書教諭からメールがあり、今年度から3年間のプロジェクトとして、山形県教育委員会の課題解決型学習のプロジェクトをやることになりました。これまでは国語科でしたけれども、全教科をオープンにして始めます。ですから今年も5回研究授業がありますが、全ての学年でそれに取り組むということです。朝陽第一小学校はすべてのクラスで学年主任が中心になって、授業をします。大変ですよ。

【汐崎委員】 何クラスあるのでしょうか。

【高鷲会長】 全部で23クラス。それが結局、学年主任がいますよね、小学校だから。その人がほかの新任の先生とかさまざまな先生を混ぜて、各学年の単元の授業案をつくり、前・中・後のように分けます。それを一遍に展開してくれるから、我々見るほうは教室を変えれば単元の流れが全部わかります。図書館に関しては、とにかく今は1年間で百八十何冊か、子ども1人当たり読んでいます。去年初めて減りましたけれども。それだけの読書力がついているので、調査はできる。かえって子ども達に先生が引きずられています。それだけ読書力があれば、学力につながりますね。それは、はっきりしていますが、なかなか現場の先生はそこまでは目が

届かない。まだ御存じない方もいるし、半信半疑の方もいらっしゃると思います。

【若林委員】 市内の小学校の図書室では、パソコンで本を探せないのですね。私の高校2年生になる孫が小学校1年生のときに、先生のお話を伺いに行った際に、その先生もいらして、そのころに私は、図書室のボランティアもさせていただいて、もしよろしかったら私たちが折込みますから、協力しましょうと言いました。あれから何年もたっていますが、そういうのをまた整備して差上げると、子どもたちは図書館を使っていますから、小学校の図書館のパソコンの設備というのも必要ではないでしょうか。

【高鷲会長】 富山県の参納さんという方が館長をしている図書館は、人口5万人ぐらいの町で、町立図書館と学校図書館をみんな一括してコンピューターを導入し、OPACをつくっている。利用券も共通にしましたね。それぐらいならできるのですよね。やろうと思えば。

【小川図書館長】 やろうと思えばね。ただ、市川市でも共同目録を考えたのですが、学校図書館の本を一般市民から要求されたときに、それに応えていかどうかという問題があるということであきらめました。

【高鷲会長】 それはありますよね。

【小川図書館長】 それで、学校図書館としては、外からのアクセスはできない仕掛けになってしまいました。

【高鷲会長】 システムにしなければなりませんよね。ですから、そういったことができることはできるのですよね、やろうと思えばね。

【若林委員】 交流が大切ですね。特に、逗子小学校の場合は、立地条件が良いですから。

【高鷲会長】 小川館長、市川市で学校図書館との連携システムを、実際にやっていらっしゃいましたよね。

【汐崎委員】 現在は、学校の現場の司書や司書教諭の話になっていますが、その問題を解決をしていかなければいけないのは学校だと思います。きちんとシステムチックに動くところと、公共図書館がうまく連携していくために、どうすればいいのでしょうか。立場・役割で考えれば、公共は公共だし、学校は学校だと思います。

【高鷲会長】 まず一つは、校長・教頭を動かすことです。

【汐崎委員】 校長先生は、きょうはいらしていないですね。

【高鷲会長】 校長・教頭に一番指示できるのは、教育長ですよ。教育長は必ず新年度に教職員を集めて講演なさるわけだから、そういうときに話をしてもらえばいい。島根県が平成21

年から学校図書館活動を始めましたよね。議会で何を言われたかという、校長・教頭という管理職が動かなければ、学校というのは動かないと。どうするつもりですかと。ことあるたびに教育長が校長・教頭の集まりに行って話します。実際にそれをやっているようです。それでも去年が第二次計画の1年目になりますが、まだまだですね。人がかわりますからね。

【小川図書館長】 市川市も教育長がカリスマでした。

【高鷲会長】 そうでしたね。

【小川図書館長】 ですから、予算がついて、システムが動きました。ただ、市川市で一緒に取り組んだ学校の先生で、小林先生がこの夏、学校図書館関係者の研修で講演をしてくださることになりました。

【汐崎委員】 その研修は、学校の主催ですよ。

【小川図書館長】 学校です。

【汐崎委員】 小林先生ですね。

【小川図書館長】 そこに校長・教頭先生が参加してくれるといいのですが。

【高鷲会長】 あと教育委員会ですね。教育委員会の担当者の参加が大切です。

【汐崎委員】 もしかしたら小林先生がおっしゃることが、自分たちの学校図書館に対する意識を超えた上のところにあるので、スルーしてしまうのではないかというのが、少々心配です。

【小川図書館長】 信じられないぐらい、うまく機能したということです。

【汐崎委員】 ですから、講義で示されることが、何か異次元のものとしてとらえられてしまふ、頭の上でスルーしてしまいそうです。

【小川図書館長】 校長・教頭に出てもらいたいと思っています。

【高鷲会長】 それが一番ですね。

【汐崎委員】 あと、教育長は初めてということですが。

【小川図書館長】 時間があれば出てくださいればありがたいです。

【汐崎委員】 教育長はどうなのでしょう、教育長の図書館に対する考え方というのは。

【小川図書館長】 さきほどの挨拶でもそうでしたけれども、図書館のことはしっかり気にされています。

【汐崎委員】 逗子市はがんばっているとおっしゃっていたところですね。

【小川図書館長】 期待をしてくださっています。

【汐崎委員】 そうですね、つなぎ役というか、パイプ役ということですね。

【辻委員】 なかなか難しいかもしれませんが、もし機会がありましたら、私たち協議会委員も逗子の小学校の図書室の現状を見に行くというのはできないものでしょうか。

【高鷲会長】 嫌がられるかもしれませんがね。でも、今度の委員は久木小学校の校長でいらっしゃるから、お願いしてみますかね。

【小川図書館長】 前の学校教育課長ですから、状況もわかるから、この次にいらしたときにその話をしてみましましょうか。御自分の学校ならオーケーとおっしゃってくださるとは思います。

【辻委員】 逗子小学校が近いですけども。

【汐崎委員】 柳原先生はどこの小学校長ですか。

【小川図書館長】 久木小学校です。逗子小学校でも大丈夫だろうとは思いますが。

【高鷲会長】 ガードはかたいかも知れませんね。逗子小学校は可能性があるから出せるかも。

【汐崎委員】 私は、随分前になりますけれど、小川館長に依頼されて久木小学校でブックトークの研修を行いました。あのときの校長先生はとてもフレンドリーで、僕もやりたい、みたいなことをおっしゃっていましたね。

【辻委員】 高館先生でしたかね。

【汐崎委員】 こういう校長先生がいらっしゃるとういなと思いました。

【小川図書館長】 高館先生はすごく熱心でした。

【汐崎委員】 ですから、そういう校長先生が生徒に、例えば読書の話、先生が生徒にお話しをしてくれるだけで、随分違いますよね。上に立つ人がどうかで、随分変わっていきますね。

【高鷲会長】 階級社会ですからね、学校というところは。

【汐崎委員】 上が右を向けと言え、みんな右を向くという。下からの突き上げが難しい。でも、朝陽第一小学校は割と下からですよ。どちらかというと。

【高鷲会長】 そうです。

【汐崎委員】 山形県の五十嵐さんは、「私はゲリラ的ですよ」とおっしゃっていました。

【高鷲会長】 次の議題4が、子ども読書活動推進計画なので、事務局より説明していただけますか。

【鈴木館長補佐】 では、子どもの読書活動の推進についてです。逗子市子どもの読書活動推進計画につきましては、平成25年3月に策定し、2年が経過いたしました。この推進計画をもとに、児童サービスを実施しましたので、御報告をさせていただきます。

資料6-1、6-2が該当する資料になります。まず、資料6-1をごらんください。昨年

度の児童サービスの報告になりますが、定例のおはなし会につきましては参加者が増加の傾向にあります。特に父親の参加が目立って増加している状況です。また、科学遊び講座やおはなし講座につきましても、ほぼ満員の盛況でした。クイズラリーにつきましては、2年目を迎えて、参加者が多数でした。平成26年度については、初の試みとして、お正月に本の福袋を用意して実施したところ、400冊近くの貸し出しがありました。

ブックスタート事業につきましては、対象者413名のところ377名の参加があり、ブックスタート事業に参加できなかった子どもたちについては、現在のところ図書館で受講することもできますが、今後は分室でも受講することができるように、準備を進めているところです。

あと、先ほどのお話の中にもありましたが、学校との連携ということで、学校支援パックも学校で利用できるものを用意いたしまして、全8校の中で1,156冊の利用があり、前年度よりも231冊多く利用されました。それ以外には、中学校、高校、大学生の実習、社会人の体験研修も夏休み期間を利用して行いました。この体験研修以外に、業務研修ということで、学校図書館指導員が昨年度新人の指導員が多数採用されました。その中で、さまざまな業務について、やはりなかなか一人体制だとわからないことが多いということがありましたので、図書館の現場で業務研修を行いました。具体的には、本の修理の方法や展示のためポップの作り方の研修、それからカウンターでの業務研修、そういったことを新採用の学校図書館指導員を対象に行いました。

今年度も同じように、たくさんの事業を行って読書活動の推進を図っていこうと計画をしています。以上です。

【高鷲会長】 はい、ありがとうございました。児童サービスというと、毎年盛りだくさんですけれど、辻委員が協力なさっているおはなし会等のニーズは結構ふえてきたようですね。

【辻委員】 私の担当している部分は、前年度比やや減っています。土曜日おはなし会に参加させていただいておりますが、紆余曲折ありましたが、大分落ち着いてきたというか、子どもさんもそこそこいらっしゃいますし、一緒にいらっしゃる大人の方も、ものすごく少ないときも、ごくまれにはありますけれども、皆さん熱心に聞いてくださっていて、やはり継続することが、大事だと思いますので、また夏休みの小学生おはなし会とか、小学生に特化したおはなし会が、ふさわしい対象年齢の児童が来てくださるといいのですけれども、図書館側から学校にももちろんチラシ等でアナウンスや、PRはされているのだと思いますが、その辺でしうかね。またそれが今後定着していくといいなと考えております。

【高鷺会長】 土曜日というのは、曜日として良くないのですかね。

【小川図書館長】 昔、言われたことがありますがお父さんと一緒に出かけようと思うときに、図書館で土曜日に行事があるから連れて行ってもらえないという子がいました。

【高鷺会長】 そうかもしれませんね。

【汐崎委員】 図書館の行事には、平日は参加できないから、土曜日にしましょうと言うと、今度は土曜日はほかのことがしたいからという展開になるのですね。

【高鷺会長】 それはあるかもしれませんね。

【汐崎委員】 この読書推進計画に基づいた報告をいただきましたが、読書推進計画というのは、市全体で取り組むことだと解釈しています。例えばインターンシップとか図書館業務研修とか、ブックスタート事業の中心となっているのは、逗子市では図書館という形ですよ。

【鈴木館長補佐】 はい、そうです。

【汐崎委員】 自治体によっては例えばブックスタート事業を子育て支援課が担当したり、図書館の姿が見えないところもありますが、これだけの読書推進にかかわるさまざまな事業を、逗子市では図書館が真ん中にいてやっているのは、それは大変です。ですから、学校図書館の図書館指導員も、読書推進の中心となることが望ましいです。

【小川図書館長】 それはこちらから声をかけないと、学校教育課はそこまでは思いつかないですね。

【鈴木館長補佐】 指導員も各学校1名ずつなので、やはりそういうスキルを学ぶ場がなかなかありません。司書教諭に聞いても、その辺はむずかしいですね。

【汐崎委員】 司書教諭さんのほうがよく知っていないといけませんね。

【辻委員】 ですから、こういう機会があると、とても、新人の方は助かると思います。知り合いの人が採用されましたが、たまたま司書の資格を持っていたので採用になったけれども、内実はよくわからないから、どうなのでしょうね。

【汐崎委員】 あと、図書館福袋という企画が最近はやっているようです。きのうも横浜市の図書館員の人と話をしていたのですが、高校生にも貸出しされていていいなと思っています。全体から言うと、例えば低学年も多いですけど、中高生がそれなりに貸し出しがあることがすばらしいなと。なかなかティーンエイジャーに対する働きかけは、むずかしいですね。

【鈴木館長補佐】 中身が見えないので。すごく興味を持たれるようです。

【汐崎委員】 テーマでくくって、帰ってから中を見てね、といった感じですよ。

【鈴木館長補佐】 それを楽しみなのですよね。

【汐崎委員】 その中身を選ぶのがすごく大変で、選書に図書館員の裁量が試されると、横浜市で福袋を担当した友達が言っていました。

【辻委員】 あと、このブックスタートの、配布絵本の統計のタイトルですけれども、これはある程度、何年に1回とか、ローテーションのように変わるのでしょうか。

【小川図書館長】 毎年NPOブックスタートが候補として出してくるものを、こちらで、今年は何れにしようかという選択はします。

【鈴木館長補佐】 予算の配分ですね。

【汐崎委員】 これは、2冊入れるのですか。

【鈴木館長補佐】 現在は、1冊です。

【汐崎委員】 業者は、少し安く提供してくださいますよね。

【鈴木館長補佐】 NPOブックスタートとの契約となります。

【汐崎委員】 そこを通せば、安くなりますよね。

【小川図書館長】 多少。

【汐崎委員】 多少ですか。

【高鷺会長】 学校支援パックの資料を見ると、逗子小学校は団体貸出が多いですよ。

【小川図書館長】 団体貸出は個々の先生からの依頼という形になります。

【鈴木館長補佐】 担当の先生が修学旅行前でそれに関係する本が欲しいとか、あとさまざまな授業で使うからということで、申し出られるケースもあります。

【小川図書館長】 読み物というより、修学旅行とか、この単位で教室に置いておきたいとか、そういうときに利用されますね。

【辻委員】 あと、このリサイクル本の提供実績を見ていて、久木自治会館が桁違いで多いのは何か理由があるのでしょうか。

【小川図書館長】 桁違いに協力的というか、関心を持ってくださるので、毎月館内整理日にいくつか箱詰めして用意しますが、その時間をねらっていらっしゃる。(笑) そのくらい熱心です。

【鈴木館長補佐】 新しく久木自治会館が久木小学校内に昨年度できましたが、やはり集客というところで、図書館のリサイクル本を考えたようです。それで、児童書を中心に置いておくと、子連れのお母さんたちがみんな来て、それを借りて行くということで、集客目的でこれを

使っているということです。

【汐崎委員】　ここで見ると、久木地区がおもしろいですね。

【小川図書館長】　距離的に言えば分室があってもおかしくない距離ですね。そう簡単にはいかないですけども。

【汐崎委員】　でも柳原先生は久木小学校の校長先生なので、柳原先生が委員でいらっしゃる間に、ぜひ久木の地域あたりを見てみたいですね。貸し出しのパック数とかでも、あとリサイクル本の提供実績でも、池子も多いですけど、久木は特に多いですね

【辻委員】　池子も市の中心地からは遠いです。

【小川図書館長】　池子の子どもたちも、なかなか図書館へは来られません。

【汐崎委員】　でもやはり逗子小学校が全然動いていないような、そんな様子も見られます。

【高鷲会長】　逗子小学校との連携に関して、調べ学習はゼロですね。

【汐崎委員】　一番使いやすく、一番便利だと思いますけれどもね。

【高鷲会長】　楽なだけだね。

【汐崎委員】　何でこういうことになるのでしょうかね。

【高鷲会長】　先生が勉強しなければなりません。これをやるには。

【汐崎委員】　意識改革が必要ですね。やはり子どもたちに影響力があるのは、先生ですからね。先生がうまく図書館の利用とかを言ってくれば、まさに図書館が目の前にあるので。そうすれば、子どもたちの利用形態も随分変わってくるはずですよ。理解のある校長先生もいらっしゃるんで、そのあたりでうまく実績をつくって、それをモデルケースとしていけば、逗子市は学校数も少ないし、そちらに引っ張られるというようなこともあるのかなと思います。

【小川図書館長】　一時動き出したのです。

【汐崎委員】　力があって理解がある先生のところではじめてときに、その先生がかわられても形が残っていて、もうやらなければいけないシステムチックなものになっていけば大丈夫だったのでしょうかね。

【高鷲会長】　山形県鶴岡市の朝陽第一小学校は、それがあったから、図書館活用特別委員会をつくり、組織化を図りました。だから、人が異動しても委員会は残る。

【汐崎委員】　それは、大事なことですよね。

【高鷲会長】　それは校長が定年でやめる。司書教諭も異動する。そのときに、このままでは将来が見えないということで、委員会づくり、それから全部やりましようとなりました。

【汐崎委員】 やらざるを得ない形にしてしまうのですね。

【高鷲会長】 そうです。私に関わってからでも、ほぼ20年が経過します。

【汐崎委員】 横浜市のように500人もの学校司書を張りつけなければならないところは、もうどう考えても意思の統一は無理です。でも、逗子市ぐらいの規模ならば、何かできることがあるのではないかと、という期待はしたい。

【高鷲会長】 教育委員会の中で、学校司書担当は、横浜市では4人ですよね。1人は指導主事がいて、2人は図書館から行った職員がいて、もう1人は、校長体験者の非常勤職員が1人、計4人。あとは何をしているかというところ、各地に事務所がありますよね、そこの国語担当の指導主事が管内を回っているようです。ですから、そのシステムがきちんとしていないと、がたがたになります。実際に職員は忙しいから、動けませんからね。特に、横浜市は中学校が荒れているから、そちらの指導だけでも精いっぱいですからね。

【小川図書館長】 給食もありますからね。

【高鷲会長】 また後でまとめて質問をお願いします。

では、次に議題5の図書館分室について、報告をお願いいたします。

【鈴木館長補佐】 議題5の図書館分室について御説明いたします。先ほどもお話をしたとおり、今年の1月から2月にかけて、図書館のコンピュータシステムの更新のための休館期間を活用しまして、分室の改装工事を行い、そして本年の4月から分室を開館し、読書の推進を図っております。職員につきましては、昨年度まで公民館に勤務をされていて図書業務を担当していた職員を中心に、それぞれ週3日勤務の非常勤職員を3名ずつ配置しております。4月当初につきましては、分室職員の配置のところに週3日、午後、図書館から非常勤職員が現場に行き勤務をしていました。ただ、分室では、9時の開館時前後が忙しいということがわかりましたので、現在は週3日、図書館の非常勤職員が朝一番で分室に出勤し、そしてお昼まで勤務した後に図書館に戻るといった勤務体制で分室を運営しています。

ちょうど分室を開館する直前に、分室は、公民館図書室時代よりも本も少なくなったし、スペースも狭くなったということで、利用者よりクレームの声もありましたが、4月に開館してからは、おかげさまで順調にきております。そして特にクレームというのもない状況となっております。ただ、4月の統計結果を見ますと、沼間、小坪、両分室ともに昨年度の4月に比べると、やはり貸出冊数は減っていることが現状として見てとれます。それにつきましては、3月まで月曜日は公民館が休館でしたが、それが休館日を火曜日に変更したということで、や

はり月曜日の利用が減少したというところが要因に挙げられます。恐らく月曜日が開館しているということが浸透していないため、来ない方がいらっしゃるようなので、月曜日は、開館していますよというところをPRして集客に結びつけていきたいと考えております。以上です。

【高鷲会長】 コミュニティセンター自体に休館日はあるのですか。

【鈴木館長補佐】 毎週火曜日です。

【汐崎委員】 つまり、月曜日がお休みで、火曜日に開いていたのが、月曜日は開館して火曜日はお休みになったのだけれど、利用者の皆さんは、月曜日はお休みだという認識のままなのですね。

【鈴木館長補佐】 そうです、はい。

【高鷲会長】 公民館からコミュニティセンターになり、何か業務で変わったことはあるのですか。

【鈴木館長補佐】 図書館分室の中での業務自体は変わっておりません。

【高鷲会長】 そうではなくて、コミュニティセンター自体の管理・運営での変わった点は、あるのでしょうか。

【小川図書館長】 所管が教育委員会から市長部局に変わったことが1つと、それから社会教育課の時は、部屋の使用が無料だったのが、有料となりました。

【鈴木館長補佐】 会議室の使用が有料になりました。

【小川図書館長】 ですから、何気なしに集まっていたものが、料金がかかるとなると行かないというのはあるかもしれません。

【高鷲会長】 それで、分室にも来なくなったということもあり得るわけですね。

【小川図書館長】 それは、あるかもしれません。

【鈴木館長補佐】 昨年度まで火曜日に講座やお稽古をやっていた方が、やはり先生の都合で月曜日に振りかえができない、というようなクレームがあったというのは聞いています。

【高鷲会長】 なるほどね、教育委員会から市長部局へ変わったというのは、最近多いですね、

【小川図書館長】 有料化が一番大きいと思います。

【高鷲会長】 そうですよ。

【小川図書館長】 それと、自由がきかない。正直言えば。社会教育施設であるために、さまざまな制約があります。

【鈴木館長補佐】 公民館ですとやはり社会教育施設であるがために、利用が限定されていま

したが、もっと市民自治として使いたいということが目的でコミュニティセンターに転用していますので、今後は地域自治、地域の住民たちが中心となって運営していく方法にシフトを変えていくという予定でいます。

【高鷲会長】 では、コミュニティセンター内の図書館分室の利用は無料ですよと大きく書かなければいけませんね。それをやらないと、恐らくどこかで引っかかるのではないのでしょうか。

【汐崎委員】 図書館の分室化にされたということは、言ってみれば図書館の傘下に入って、その地域でのミニ図書館、ミニ逗子市立図書館としてのある一つの業務を完結形になると思います。そうなるとう規模も小さくて、蔵書も少ないのですが、中央館で展開しているような企画展示とか、子どもに対することもきちんと取り組んでいくことが必要ですね。

【鈴木館長補佐】 4月から始まったばかりですが、それが落ち着いたら、逆に図書館で行っている展示等も出張サービスとして、巡回して、分室で実施をする計画も立てています。

【汐崎委員】 時期をずらして、分室に持っていくとかの工夫が必要ですね。

【鈴木館長補佐】 わざわざ図書館に来なくても、その地域で見ることができるというような形で取り組んでみたいと計画しています。

【汐崎委員】 まだ移行したばかりですからね。

【辻委員】 おはなし会とかは企画していないのですか。

【小川図書館長】 現時点では、それらの企画はしておりません。4月からしばらくの間は、貸出・返却・配架等の日常業務をこなしてもらうこととなります。分室の職員が図書館職員と同じようなレベルになるためには、少々頭の切りかえも必要ですが、それには時間がかかります。

【汐崎委員】 でも、将来的には公民館図書室の職員ではなくて、図書館の職員となるわけですね。

【小川図書館長】 既にそうになっています、

【汐崎委員】 辻委員が言われたように、図書館職員としての意識を持ってもらうことが必要ですね。

【小川図書館長】 そのようにもっていかないと、図書館の仕事として取り組むことを意識することなく、身につかないと思います。

【鈴木館長補佐】 現在は図書館の職員が週に3回現地に行き、そこで情報交換をしています。図書館ではこういう業務を行っているとか、こういう形で雑誌の受け入れをしているというよ

うなレクチャーをして、少しずつ図書館職員の状況がわかるような形を取りたいと思います。

【汐崎委員】 現在、分室に6名が配置されているとのことですが、以前は公民館の職員として勤務されていた方が、いわゆる身分が変わった。身分は変わったけれども、現実はまだ意識の切り換えはできてないということですね。

【小川図書館長】 難しいですね。司書ではありませんから。

【汐崎委員】 では、そのあたりを、図書館からくる職員との交流を通して、「自分たちは図書館の職員であり、こういうことは図書館の仕事としてやらなければならない」ということを、指導していくことになりますね。

【小川図書館長】 4月の早いうちに図書館に来てもらい、一緒に研修を受けてもらいましたが、でも、やはり現地へ戻れば、それまで通りと変わらなくなってしまいます。

【汐崎委員】 お城になってしまいますね。

【高鷲会長】 お客さんも同じですからね。

【汐崎委員】 でも、そういうところでもう公民館図書室ではなく、図書館分室になったことでさまざまなサービスの展開が可能性として広がってくるということを、地域の方がわかってくださると、図書館に対する見方が変わってくると思います。そうでなければ、移行した意味というものなくなりますので。

【鈴木館長補佐】 図書館の職員が分室に行くと、やはり顔が違う、新しい職員が来たということで、利用者の方もやはり声かけを結構してくれるようです。

【汐崎委員】 警戒するのではなくて、逆にそうなりますか。

【鈴木館長補佐】 結構声がかかる率が高いと、職員が言っていますので。その辺からも、地域の方は、期待していると思います。

【若林委員】 そうですよ、きっとね。

【汐崎委員】 そのあたりはもっとPRをしていく必要がありますよね。

【高鷲会長】 そうですね。本当は職員が歩かなければならないわけだけれど。

【汐崎委員】 いや、でも大変ですね。これだけのことを本館で実施し、さらに分室に持って行かなければならないわけですからね。

【高鷲会長】 あれもこれもやれと言われるわけですからね。

【辻委員】 常勤の職員さんが少ないわけですから。

【高鷲会長】 大変ですね、確かにこれは。事務局からの議題についての説明は終わりました。

たが、何かこれまでのところで補足的な説明が必要だとか、あるいは質問はございますでしょうか。御遠慮なくどうぞ。

【汐崎委員】 読書推進計画は何年の計画でしたでしょうか。5年スパンぐらいでしょうか。

【鈴木館長補佐】 平成25年度から29年度までの5年計画なので、そろそろ第2次計画の策定の準備に入ります。

【高鷲会長】 国の計画に合わせているから、5年計画ですね。

【汐崎委員】 神奈川県は100%ですよ。まだ40%ぐらいしか出ていない都道府県もあります。

【高鷲会長】 神奈川県では、藤沢市がやはり統計ではナンバーワンで。次いで逗子市ですね。今のところ。

【汐崎委員】 最近、読み聞かせとか絵本に対する関心が、子どもを抜きにして高まっています。私も少しかかわっていますが、国立青少年教育振興機構が実施している絵本専門士の講座は、今年の3月に第1期生が修了して、今年は第2期生となります。30人の募集に対して昨年は約800人の応募があり、さまざまな先生方が来てくださいます。講習料は5万円ですが、それでも、全国各地から自腹を切って参加する人が大勢いらっしゃいます。しかし、どうもそれは図書館という感じではありません。もちろん図書館の方もいらっしゃいますが、子どもの読書というか、絵本というのが例えば大人同士で読み合うとか、まるでセラピストのような形で扱われたりしています。絵本セラピスト協会という組織があるのを知り、びっくりしました。そういう意味での絵本というのも、もちろんあってもいいとは思いますが。やはり大人も大人の立場で絵本を求めるところがきっとあるのだろうなど。でもそうになると、児童サービスとまた離れた形での絵本への関心に思えます。どうなのでしょう、辻委員はどのように感じていますか。

【辻委員】 どうなのでしょう。

【汐崎委員】 絵本が好きだけでも、実際は子どものことはあまり見ていない大人とか、結構いますよね。

【辻委員】 そうですよ。現在、メディアで取り上げられる機会も多くなっていますので、そういうジャンルの絵本があるというのは、承知していますが、やはり私たちがかかわってきたいのは、オーソドックスな、これだけは伝えていきたいというような、何十年と読み継がれてきた絵本とか、そういうのはやはり確認しながら扱っていきたいなど。もちろん、どんどんいい絵本は、出版されていますから、そちらを無視するというわけではありませんが。どう

なのでしょうかね。

【汐崎委員】 異様な絵本ブームです。それが何となく危ないと思っています。大人たちが自分たちの癒しの形で絵本を使っている。それはそれで一つの動きだと思うのですが。今年は第2期となりますが、2コマ開講となります。その人たちが絵本専門士となり、それで一体何をするのか、とても気になります。そういう人たちが広まっていく中で、辻委員がおっしゃったように、子どもたちに、読書の働きかけとしての絵本を手渡していく、ということに基づいている図書館の力が大切です。この絵本ブームの中で、図書館のスタンスが求められているのかなという気がします。私もうまく言えないし、自分の言いたいことが伝わっていないのですが、何か妙な動きが、世の中で起こっていますね。

【高鷲会長】 それについては、公共図書館の場合には、子どもの絵本の専門家は、数は減っているでしょう。どんどん。専任ではなくなっているから。

【汐崎委員】 絵本は大好きで、絵本によって癒されたいという人は増えています。でも例えば図書館が絵本を所蔵して子どもたちに提供するという児童サービスの中に、こういう絵本専門士の手法が入ってくると、図書館での絵本の姿が全然見えてこなくなる。もちろんこれは一つの文化であり、表現の自由であり、受け手の自由なのですが。

【高鷲会長】 それは、柳田邦男さんあたりからそちらの方向へ向かっているのではないですか。

【汐崎委員】 柳田邦男さんが、講師の中にいらっしゃいます。

【高鷲会長】 やはり。

【汐崎委員】 あと、いせひでこさんもいらして、知性・感性・技能を磨くというような様々な講座内容になっています。一体これは、何を求めているのかなと。主催は、文部科学省の下部的組織なので、本来対象は青少年、つまり子どもを対象とした、文化活動のことを考えているのだと思っていましたが、少し違うようです。この絵本専門士の講座は、どうも子どもだけが相手ではありませんよね。

【高鷲会長】 むしろ大人が対象ですね。

【汐崎委員】 もちろん子どもたちに読み聞かせをしたい、という方もいらっしゃいます。でも、「自分たちはこれだけ学んだのだ」ということを振りかざして、子どものところまで手を伸ばしてこられると、ものすごくイベント性が高く、絵本が目的ではなくて、絵本が手段になってしまうような、働きかけも出てくる、そういうことが嫌だなと感じます。

【若林委員】 私もそのことを新聞の記事で読んだときに、一つ思ったのは、私の専門の立場から言うと、セラピーとか、癒しということがすごく簡単に使われていますけれども、ある意味では苦しみを超えた後にくる癒しというのは、かなり専門性が高いです。ところが、ああいふムードでもっていくのは、とても私は、すごい危険さを感じました。ですから、市民の皆さんもそれに多少ブレーキをかける考えを持たなければいけないと思います。

【汐崎委員】 簡単にセラピーとか言ってほしくないと思います。

【若林委員】 セラピーはものすごい危険を伴います。

【汐崎委員】 私も全然実態を知りませんが、絵本セラピスト協会とか、絵本セラピスト士認定と言っている、一体この人たちは何なのでしょう。

【小川図書館長】 子どもの絵本は、楽しむものでしょう。楽しむために子どもに与えるわけだし、子どもがそれで楽しめればいいわけで、3歳の子どもの癒されるというのは、おかしな話ですね。

【若林委員】 世界を広げていくだけでいいわけですよ。癒しというのは、必要ありません。

【汐崎委員】 癒されるということは、傷ついている子たちがいるということですからね。

【若林委員】 癒し方も、一つ間違うとカルトにもなりますし、宗教的なものもかかわってきますから。

【辻委員】 東日本大震災の後も、結構絵本が出版されて、それで癒しのようなブームになりましたよね。

【小川図書館長】 そういう絵本がたくさん出ています。

【若林委員】 私は、それがすごい危険さを感じます。

【小川図書館長】 図書館では、購入しないといけないというような雰囲気がたくさん出されています。

【汐崎委員】 結果として自分たちが日常から離れて、少し楽しい思いができるというのはいいのですが、明らかに、かわいそうだ、大丈夫だ、でも頑張れよといった、本当にカルトとか宗教的な色も感じます。

【若林委員】 癒すということは、すごく深い作業ですから、とても危険で、一つ間違えるとカルトだとか、あるいはもっと混乱させたりすることになります。

【汐崎委員】 でも、そういう思いが強いと、この絵本はこういう絵本で、この絵本によってこういう効果がある。だからみんなそれを提供しなくてはいけないということにつながって

くような、絵本教のようなものでしょうか。

【若林委員】 そうです。私は、あの制度を見たときに、心配になりました。

【汐崎委員】 図書館員は、中立であるべきだと思います。きちんと資料を客観的に評価して、今の子どもたちに手渡すべき本、あるいは読み継がれてきた本を、自分がパフォーマーではなく、本のよさをそのまま子どもたちに伝えていく。そうなるはずですよ。私は長い間そう信じてきたので、違和感を覚えます。ですから、逆に現在、図書館側がそれに対してきちんと図書館の児童サービスというのを打ち出していないと、どこか変な形で混乱する気がしますね。

【若林委員】 私も新聞記事を読んで、心配になりました。汐崎委員にそうおっしゃっていたので、ほっとしました。

【汐崎委員】 安易に絵本が手段化されているところに危険さを感じます。

【若林委員】 危険な感じがしますね。

【辻委員】 その他の件でよろしいでしょうかね。

【高鷲会長】 はい、どうぞ。

【辻委員】 質問したいのは、図書館のホームページが更新されて、とても見やすく、すっきり、よくなったと思いますが、それについてコメントが寄せられたとか、反響があるとか、それはないのですか。

【小川図書館長】 現時点で、それはないですね。

【辻委員】 そうですか。私たちの図書館協議会の会議録もきちんと見られるようになりましたね。

【汐崎委員】 リニューアル作業はどなたが担当されたのでしょうか。

【小川図書館長】 本年2月にシステム全体を変更したときに、同時にいたしました。その前からソフトの管理をお願いしている業者と、時間をかけて協議・相談をしてきました。

【鈴木館長補佐】 利用者からの要望等もありましたので、そういうものを全てたたき台にして、職員と業者との打ち合わせをした中で要望を出し、現在の形となりました。

【汐崎委員】 では、こちらから業者に、こういう内容でという形でつくらせたのですね。

【高鷲会長】 その業者は、横須賀にあるのですか。私の教え子はその会社の中にいます。

【小川図書館長】 横須賀市の小川町にある会社です。

【高鷲会長】 彼女は理系なので、そういう作業は得意ですね。

【辻委員】 反響があるといいですね。

【小川図書館長】 ほかのホームページに比べたら使いやすいと思っています。

【高鷲会長】 東京子ども図書館の機関誌と学校図書館活動のマニュアルを今日もってきました。

【汐崎委員】 これですか。

【高鷲会長】 それです。東京子ども図書館の元研修生で、学校図書館に勤めている人が何人かいて、その人たちがマニュアルつくったそうです。

【汐崎委員】 きのう児童図書館研究会の総会で買ってきました。500円でした

【辻委員】 どこで買えるのでしょうかね。

【汐崎委員】 東京子ども図書館か、教文館あたりでしょうね。

【高鷲会長】 これは、よくできているので、できたら逗子市の小・中学校の学校司書さんにも見てもらいましょう。

【汐崎委員】 よかった。今日お見せしようと思っていました。

【高鷲会長】 それはぜひ読んで方がいいですね。

【小川図書館長】 当館の職員も行っているでしょう。

【汐崎委員】 彼女も行っています。

【小川図書館長】 買っていませんか。

【汐崎委員】 どうでしょう。15冊しかなかったのので、私が先に買いました。東京子ども図書館で1年研修した子たちが、本当にかわいそうですけれど、3年とか5年とかのスパンで、学校図書館で働いているケースもあり、もちろん今でも働いている若い子たちがいるわけですが、その子たちが一人職場なので、手さぐりで取り組んでいます。でも、意欲のある子たちなので、自分たちがこういうことを始めたらいいのではないとか、教わったことを生かしながら、それを成果としてまとめようという形で、本当に実務的にまとめられています。

【高鷲会長】 よくできていますよね。

【汐崎委員】 こういう本も、すごく実務に即しているし、厚い本ではないので、ぜひ現場の職員が読んでみてはどうでしょう。

【高鷲会長】 本当に学校図書館の初心者にはいいですよ。東京学芸大学附属大泉小学校の学校司書がかかわっていますね。

【汐崎委員】 彼女はきのう来ていました。

【高鷲会長】 私はその人しか知りませんが、彼女はJICAで、外国で活動したこともある

し、結構おもしろい女性です。

【汐崎委員】 つくった子たちが、みんな名前に「み」がつく人たちなので、編集は「みの会」だそうです。

【高鷲会長】 それで「みの会」ですか。何だと思いました。

【辻委員】 読み聞かせも、やってらっしゃるし。

【高鷲会長】 あと、今年初めに出た松岡享子さんの「子どもと本」（岩波新書）は、おもしろいですね。

【辻委員】 「子どもと本」が出ましたよね。

【高鷲会長】 小田光雄さんという出版評論家が、あの本を取り上げて、私立図書館にかかわっているのだろうけれども、蔵書についてきっちりとした考え方を載せているのは、最近では珍しいと。松岡さんは、あの本の中で書店とは違うということをきちんと書いている、書店と違って、図書館というのは、昔の本で今に価値のある本を、とにかくきっちり備えなければいけないと説いています。

【汐崎委員】 あと、松岡さんは将来の利用者を想定して、ということを書いていますよね。あの本は2刷、3刷ぐらいまでいっていますね。

【高鷲会長】 小田光雄さんが書いていますが、何かの機会に、根本彰さんと話す機会がありました。彼は何もそれについて言わなかったと書いていて、書店はフローで、図書館がストックだと、そうおっしゃっていたと。

【辻委員】 これは、5年前の「広報ずし」ですが、そのままとってあるのですが。

【汐崎委員】 表紙は小川館長ですね。

【辻委員】 またこういう特集を、「広報ずし」で取り上げてもらってもいいのではないのでしょうか。

【鈴木館長補佐】 広報の掲載希望は出しているのですが、全庁的なものなので、手を挙げてもなかなか順番が回ってきません。

【汐崎委員】 小川館長は、さまざまなところに出でいらっしゃいますね。

【辻委員】 公民館図書室もああいう形になったわけですし、さまざまな企画展示、「健康・医療情報コーナー」、「石原慎太郎文庫」の設置など、この5年の間には大きな動きがあり、昨年度は、盛りだくさんだったということですが。

【汐崎委員】 これは、おもしろいですね。

【高鷲会長】 私は、持っています。

【汐崎委員】 私も、欲しいです。

【高鷲会長】 鈴木さん、広報のトップページに図書館分室の件を載せてもらったらどうでしょう。

【鈴木館長補佐】 なかなかトップに載せていただくというのはむずかしいですね。

【汐崎委員】 表紙に図書館の記事が載るのは、いいですよ。

【鈴木館長補佐】 広報のページの中に記事は入れてもらっています。

【小川図書館長】 当時の広報担当の職員がすでに退職しています。その職員が図書館にもものすごく関心があり、話をしているうちに、掘り起こしていきましょうという計画が立ち上がり、あのような広報の発行となりました。

【高鷲会長】 前の伊藤会長のときだと思いますよ。

【汐崎委員】 こうするとすごく図書館が開放的で、行ってみようという気分になりますよね。

【辻委員】 みなさん「広報ずし」はよくご覧になっています。

【高鷲会長】 全世帯に配られるわけだから、大きいですよ、その効果は。

【辻委員】 あと、最後にもう一つ。今のところ指定管理に向けた動きはストップしたままと
いうか、この6月の議会での動きはないのでしょうか。

【鈴木館長補佐】 文化プラザの複合施設全体の指定管理者制度の導入という方向性自体は変わ
りませんが、現時点で6月市議会の動きは、今のところありません。

【辻委員】 わかりました。

【汐崎委員】 ただ、平井市政が継続するという事は、心のどこかにまだ指定管理の件は残
っていますよね。

【辻委員】 私たち市民の立場から見ていると、よくわからないのですけれど、市民交流セン
ターが株式会社パブリックサービスの指定管理になりましたよね、4月から。その流れで図書
館もということがあるのでしょうか。

【鈴木館長補佐】 市民交流センターは、3月までと変わりなく運営ができていたということ、
それから市民の方からのクレーム等は今のところないということで、4月のゴールデンウィー
クの前に担当所管に聞いたところでは、そのような回答でした。

【辻委員】 全部の施設が有料で、減免なしの最低1,500円になってしまいましたので、私た
ちのグループも極力使わない方向で、フリースペースを使うしかありませんね。

【鈴木館長補佐】 市全体が有料化という方向性です。それは変わらないので、体育館を使うにしても、会館を使うにしても同じで、利用者が使う場合は受益者負担という形ができるという考えです。

【小川図書館長】 一般的に言えば、人件費と福利厚生費と、債務の返済とで、あわせて市の歳出の98%に達します。残りの2%で図書館の事業やさまざまな事業を展開するわけですから、しかも逗子市は高齢社会に入っているから、所得税が少なくなっています。新たなことは、何にもできませんね。

【高鷲会長】 人口推計の統計を見ていると、すごいですね。30年後は3万人になるとなっていて。さらに高齢化率が相当高い。

【小川図書館長】 大企業があるわけではないし。お店も出店・閉店が多く、継続的に収益の安定しているお店は少ないですね。

【若林委員】 銀座通りも結構シャッターが閉まったままの所が多いですよ。あまり経営的に良い商店がないのかなという感じで心配です。

【小川図書館長】 税収が少ないわけですから。

【高鷲会長】 そうですよ。所得税分が、がっくりと減りますから。

【汐崎委員】 もうこれから先は若い世代を呼び込むしかないですね。

【小川図書館長】 このままいっても、財政規模は小さくなる一方ですね。子育ての中で、さまざまなサービスが受けられるということをおねらえばできるかもしれない。その中で、図書館の役割を見出していく必要があります

【汐崎委員】 文化的で住みやすい、子育てしやすいという条件が必要ですかね。それで、若い世代を呼び寄せる。

【小川図書館長】 そういうことでもないと、逗子は家賃が高いですから。

【若林委員】 横須賀線の70%が逗子駅始発ですし、京急もあるので、若い世代には魅力的なまちではないでしょうか。若い知人に通勤にはいいわよと、それから子どもを遊ばせるのも、自然にも恵まれているし、学校も比較的家から近いと言っています。小さなまちですからね、子どもを育てるのはいいはずですよ。

【高鷲会長】 小川館長、横浜市は税金が高いですね。固定資産税はとて高いですね。何でこんなに払わなければならないのかと。その分、戻ってもきませんからね。図書館に関しては、横浜市の図書館の本は、汚れや傷みの多い本が目立ちます。予約しても、300番目とか400番目

になったりしますから。

【汐崎委員】 予約で、8年待ちますというような感じですよ。買ったほうが早いですね。

【小川図書館長】 そうですね。横須賀市でも300番目ぐらいになりますね。

【汐崎委員】 私は横須賀市の図書館から、子どもの本しか借りていないのですけれど。

【高鷲会長】 逗子市とか東京都の東村山市の図書館へ行くと、本がきれいだと思ってしまう。逗子市の人口は6万人弱でしょう。東村山市で13万人ぐらいだから。では、きょうの議題は終わりました。どうもありがとうございました。